

第2回 越後から会津、米沢へ

上杉景勝

(全3回)

文=今福 匡 さん
神奈川県出身。歴史ライター。米沢温故会・米澤直江會会員。主な著書『「東国の雄」上杉景勝』『図説上杉謙信』『前田慶次 武家文人の謎と生涯』など。



豊臣政権に臣従

天正10年(1582)、織田信長の攻勢、国内の反乱を前に上杉家は滅亡の危機にたたされましたが、本能寺の変によって、ピンチを切り抜けました。上杉景勝はこの機を逃さず、武田家滅亡後の北信濃へ侵攻、川中島一帯を制圧します。

明智光秀を討ち、天下人に躍り出た羽柴秀吉が上杉家に接近してきました。対する上杉側の外交窓口は直江兼続です。秀吉の奉行衆である石田三成らは兼続に対し、景勝の早期上洛をすすめました。天正14年(1586)、景勝は上洛を決意し、豊臣政権に臣従します。戦国大名から豊臣大名への転身でした。景勝と上杉家は、秀吉の天下平定事業に協力する道を選んだのです。この時、中途に出迎えた石田三成が「景勝様は重口(口数が少ない)の人である」という評を前田利家に伝

えています。景勝が無口な人物というイメージは、当時からあったようです。

豊臣政権をバックにつけた景勝は、国内の反乱を平定します。合戦をはじめにも秀吉の許可が必要になりました。景勝は、秀吉の関東・奥羽仕置、さらには朝鮮出兵という軍役を果直につとめました。

会津移封と関ヶ原合戦

慶長3年(1598)正月、上杉家は越後から会津への国替えを命じられました。それまで領していた越後、北信濃は召し上げられ、会津・福島・米沢、これに庄内・佐渡を加えた120万石が新たな領地となります。大幅な加増でしたが、領地が分散して支配しづらい難点がありました。8月、京都では秀吉が病死します。翌年、豊臣政権内の対立が表面化し、石田三成が失脚します。事態を收拾したのは大老徳川家康でした。

慶長5年(1600)、景勝の領国整備を警戒した隣国の大名が、「上杉家に謀反のきざしあり」と訴えます。豊臣家の大老として専権をふるう家康はこれを見逃さず、会津在国中の景勝に上洛を命じました。景勝は讒言(ざんげん)をした者を取り調べよう要求しましたが、家康は承知せず、会津攻めを決定します。理不尽な言い掛かりに対し、景勝は重臣たちに会津征討軍を迎え撃つ決意を伝えました。

しかし、事態は急転します。家康が出陣中に、石田三成らが挙兵したのです。三成は景勝と連絡をとりますが、上方と会津の距離は遠く、十分な連携には至りませんでした。そして、西へ反転した会津征討軍は、9月に美濃関ヶ原において三成ら西軍を破りました。

上杉家の戦後処分

景勝は会津にあつて、直江兼続を主将として最上攻めを命じていました。関ヶ原の敗報が届いた後も、伊達・最上氏との対峙が続いていましたが、遠隔地の佐渡・庄内は敵の手に落ちていました。慶長6年(1601)7月、家康の勧告を受け入れた景勝は、兼続をともなつて上洛し、謝罪しました。

8月、上杉家は米沢・福島30万石に減封という厳しい処分が下りました。景勝は「武命の衰運、驚くべきにあらず」と、潔く受け入れます。景勝が米沢城に入ったのは、10月28日のことでした。

※尊号は略して記載しています。



「上杉景勝像」
(米沢市上杉博物館所蔵)



よねざわ
景勝めぐり

上杉景勝公の甲冑 場所/宮坂考古館

〈開館10時~17時10月~3月は16時閉館〉
※月曜日・祝祭日の翌日は休館、入館料あり

問合せ/秘書広報課 ☎(22) 51111
◆次号は「第3回 上杉の城下町・米沢の誕生」をお伝えします。